

女子学生における自己と父母の認知について (3)

——タイプ分析の試み——

秋 山 幹 男

前報²⁾では、4年間を通して調査に協力してくれた女子学生10名を対象にして、学生のみた自己と父母の三者の認知関係を方法論的にある程度納得のいく線まで追求し、まとめあげてみた。その結果、以前の研究¹⁾で考案し、前報²⁾において改良・工夫を加えた「7区分表示法」が、この三者間認知の関係をよりの確にとらえる一つの有効な方法であることを確認できたのである。ついで、この方法を使った量的分析からではあったが、三者間の認知の仕方には大きく分けて5つの純型のある可能性がクローズアップされるという大きな成果をも得た。

これらの研究は、1972年から1975年までに実施された第一次の調査資料をもとにして分析・検討を試みたのであるが、早いもので10年後に予定していた第二次の調査開始が来年になった(1982年から1985年まで)。この追跡研究のねらいは、一定期間(10年単位)ごとに三者間の認知関係の変動・推移をみようとするものである。1972年に第一次の調査を開始した時から、なかなかこの長期計画に対する比較検討のための方策が決定できずに試行錯誤をくり返していたが、やっと前報²⁾の論文において方法の模索の結果、ある程度研究のまとめ方についてのめどがたったのである。

とはいえ、これまでの研究では、やっと大まかに5つの純型があるのではないのかという可能性をつかんだだけであって、はっきりとこれを確認しているわけではない。この件については学会³⁾で一部発表してみているが、本研究ではさらにつこんで7区分表示法を駆使し、自己と父母の三者間認知におけるタイプ抽出に取り組んでみることにした。ただし、前報²⁾のように4年間を通しての分析はしない。今回は、1・2年時と3・4年時に分けてタイプ抽出を試み、またその推移をみつめながら、今後の研究の方向を探りたい。

方 法

対 象 者 1972年(昭和47年)に入学した広島文教女子大学文学部生(国文学科・英文学科)と短期大学部生(幼児教育学科)を対象に、4年ないし2年間調査を継続実施した。1・2年時に2年間続けて協力してくれた学生は文学部生12名、短期大学部生16名の計28名。3・4年時の2年間継続者は文学部生の16名であった。なお、このうちで4年間継続して協力した学生は前報²⁾のごとく10名であった。

実施期日 1年時:1972年(昭和47年)12月中旬調査用紙配布、同年12月25日までに回収。

2年時:1973年(昭和48年)12月中旬調査用紙配布、同年12月25日までに回収。

3年時:1974年(昭和49年)12月中旬調査用紙配布、同年12月25日までに回収。

4年時:1975年(昭和50年)12月中旬調査用紙配布、同年12月25日までに回収。

実施方法 調査用紙を封筒に入れ学生に配布し、記入が済んだら提出するように求めた。記入は各自の住居においてなされた。

調査用紙の内容 西平⁴⁾が青年の「自我同一性」の調査用に作成した75項目を使用した。た

だ、尺度は彼のもちいた5段階評定を改めて7段階評定とした（第二次の調査からはもとの5段階に戻す予定である）。評定の対象は、「自分自身」「青年らしさ（女性）」「母親（自分の）」「父親（自分の）」の4つとし、この順に綴込んである。ただし、「青年らしさ」については前報²⁾³⁾と同様分析からは除外した。各評定対象に対する75項目は、対人関係・性格特性・生活態度・社会意識・人生に対する諸要因よりなっているが、その内訳は次の通りである。

——75項目の内訳——

1 親切な	27 献身的な	53 （毎日の生活に）生き甲斐
2 おく病な	28 感動しやすい	を感じる
3 さっぱりした	29 趣味の広い	54 利己的な・自己中心的な
4 虚栄心の強い	30 計算高い（がめつい）	55 宗教的な（敬虔な）
5 やさしい	31 スケール（器）の大きな	56 しょげやすい
6 なげやりなところのある	32 あきっぽい	57 ロマンチックな
7 ユーモアのある	33 手先の器用な	58 支配欲の強い
8 頑固な	34 古いものの考え方をする	59 理想主義的な
9 子ども好き	35 美的感覚（センス）のある	60 ひねくれた
10 権力を求める	36 疑い深い（不信の）	61 進歩的な（革新的な）
11 ものを深く考える	37 礼儀正しい	62 観念的な
12 意志の弱い	38 甘え（た）	63 几帳面な
13 おうような	39 （性的に）純潔な	64 熱狂的な
14 しっと深い	40 わがままな	65 正義感の強い
15 明るい	41 未来に大きな希望をもつ	66 ニヒルな（未来に希望や理想のない）
16 感傷的（オセンチ）な	42 無責任な	67 調和のとれた
17 行動力のある	43 包容力のある	68 目上の人にこびる
18 内気な（はにかみやの）	44 粗暴な	69 独立心の強い
19 若さにあふれた	45 ねばり強い（根性のある）	70 強がり（の態度をとる）
20 孤独な	46 大人のまねをする	71 ひたむきな
21 指導力のある	47 素直な	72 うぬぼれの強い
22 神経質な（線の細い）	48 服従的な	73 非妥協的な
23 体の強い（たくましい）	49 友人の多い（社交的な）	74 強い刺激を求める
24 ヒステリックな	50 他人を気にする	75 のんきな（楽天的な）
25 冒険好きな	51 スポーツ好きな	
26 不安定な	52 政治に無関心な	

なお、評定対象の「母親」と「父親」については、項目39と46は除外した。

結果と考察

まず最初に、今回の結果の処理法と前報³⁾のそれとの類似点と相違点についてあげておこう。

その1：評定対象三者間認知関係の比較を実施する際、前回の論文²⁾では4年間をベースにしてまとめたので、10名の文学部生の4年連続（±4）または3年にわたって出現した（±3）項目について検討がなされた。しかし、一つの妥協に至るまでに苦慮したことは、短大部の2

年間連続の協力者16名の学生と、4年間は続けて協力できなかったけれども3年間とか1・2年の時、3・4年の時に続けて協力してくれた文学部生のデーターの切り捨てについてであった。そこで今回は、これらの協力学生の資料を生かすためにも、1・2年時と3・4年時に分け、その各々の年時において2年連続して選択されている項目とその数を取り上げることにした。

その2：調査用紙に記載されている各項目に対する回答は7段階評定でなされたが、集計にあたっては「はい」＝(非常にそう思う～どちらかといえばそう思う)「?」＝(ふつう・わからない・なんともいえない)「いいえ」＝(どちらかといえばそう思わない～全くそう思わない)の3段階で処理したのは前回²⁾と同様である。

その3：評定対象三者間の分析にあたって使用された区分は、「三者共通」「二者共通」(自分自身と母親、自分自身と父親、母親と父親)「自分自身のみ」「母親のみ」「父親のみ」の7つであった。質的分析の一方法として試みた前報²⁾の10名中3人以上の学生によって選択された項目の7区分表示は、自己と父母の三者間認知をうまく取らえているといえる(表15)⁽²⁾。この方法はこれからも生かしていきたいが、今回は25%以上の学生によって選択された項目をもって分析をし、内容の検討については10名の学生のものを使ってみた。

その4：学生からみた三者間認知におけるタイプ分け(表5)においては、西平⁴⁾の社会的に望ましい項目〔奇数項目〕と望ましくない項目〔偶数項目〕ということにあまりにもとらわれすぎてしまった。青年の自我同一性の調査用に作成された項目リストであったのに、それが即両親の望ましい項目・望ましくないものにあてはまるということにはならないことに十分気がついてはいたのだが、前報²⁾ではその枠ぐみのなかにあまりにもとらわれすぎてしまったのである。そのためにある項目には大いに疑問を感じつつ、望ましい・望ましくないという彼の分類にしたがってしまい、それをもとに数量化がなされた。また、項目73～75はどちらともいえないとする彼の考えのもとで計算からは除いてしまった(学会発表³⁾においても)。しかし、青年期と成人期を比べた場合、当然価値的に変化する項目もかなり存在することは事実であろうし、一概に決めかねるものである。そこで今回はこの反省をもとにして、社会的に望ましい・望ましくないという枠を完全に排除して数量的分析をなし、各区分ごとの出現項目については質的な内容を照らし合わせながら検討していくことにした。

その5：個人個人のタイプ分けをする際には、7区分表示図をもちいて出現率の算出を各区分ごとにおこなうことになる。前回²⁾は、10名の平均出現率とそのSD(標準偏差)をまず計算し、ついで+1SD以上の出現率をみせる学生を探し出し、それをもとに10名の7区分の表示内容を量的に分析し、タイプ抽出の可能性をみ出したのである(ただし、この場合は社会的に望ましい項目と望ましくないものとに分けて)。その結果は、学会発表³⁾において「三者共通型」「父母接近型」「個性型」「母子接近型」「父子接近型」という5つの純型と、その複合型そしてそのいずれにもはまらない不定型という認知タイプとして把握され命名された。

これは、わずか10名のデーターから得られたもので本当に幸運であったとしかいいようがない。ただ、+1SD以上の出現率を用いた場合は、各区分ごとに抽出される人数にばらつきがでてくるので、もう少し人数をそろえることに重点をおいて、学会発表³⁾で用いた第3四分位数(Q₃)以上、つまり75パーセンタイル点以上にはいる出現率を各区分ごとに1・2年時と3・4年時別に出してみた。上位1/4がはいることになり、抽出人数は一定してくる。ただし、SDの場合よりはかなりばらつき幅がひろくなる。これでいくと、1・2年時では7名、3・4年時では4名ということになるが、同率の出現もあり1名位の増はありうる。

1・2年時と3・4年時における出現項目の比較

以上、5つの事を念頭において、これからの分析にはいってゆこう。

表1 2年連続して選択された項目数 (単位 コ)

年 時	1・2年時			3・4年時		
評定対象	自分自身	母 親	父 親	自分自身	母 親	父 親
Mean	38.7	36.6	39.5	47.1	43.6	44.2
SD	8.8	11.0	12.2	11.4	11.2	13.1
Mdn	38.5	33.5	39.0	50.0	43.5	43.5
range	21~60	18~63	17~59	28~63	25~65	22~70

表1は、1・2年時と3・4年時別にみた2年連続して選択された項目数であり、これを7区分表示によって比較してみたのが表2の1と表2の2である。

表2の1 評定対象三者間の7区分表示による1・2年時と3・4年時の比較 (単位 コ)

—— 1・2年時 ——							
区 分	三者共通	母子共通	父子共通	父母共通	自分自身のみ	母親のみ	父親のみ
Mean	10.1	6.5	6.6	9.5	15.6	10.6	13.4
SD	7.2	3.0	4.8	7.6	5.7	6.1	6.2
Mdn	8.0	6.0	5.0	7.0	14.5	10.5	13.0
range	1~27	2~15	0~21	1~36	5~27	3~28	4~28
—— 3・4年時 ——							
Mean	12.3	8.4	7.3	11.1	19.2	11.9	13.5
SD	6.1	6.8	6.5	8.4	6.8	7.1	7.0
Mdn	11.5	6.0	3.5	10.0	21.5	9.0	12.0
range	3~23	2~31	1~23	1~38	6~28	3~28	2~24

表2の2 7区分ごとにみた平均出現項目数の比率化 (単位 %)

—— 1・2年時 ——

区 分	三 者 共 通			母子共通		父子共通		父母共通		自分自身 のみ	母親 のみ	父親 のみ
	自分	母親	父親	自分	母親	自分	父親	母親	父親			
Mean	25.0	26.6	24.4	17.4	19.5	16.2	16.6	23.7	22.6	41.4	30.2	36.4
SD	15.6	15.4	13.4	8.1	10.5	9.3	10.0	13.5	13.7	14.6	16.2	16.7

—— 3・4年時 ——

Mean	26.6	27.6	28.8	17.4	19.3	14.6	15.6	24.9	24.6	41.4	28.3	31.0
SD	14.2	11.8	14.6	11.2	12.2	10.7	11.6	13.5	12.6	15.4	14.4	16.1

次に選択された項目の質的な分析を試みてみよう。今回は、25%以上の学生によって選択されたものを、1・2年時と3・4年時の三者関係のからみあいのなかで比較させてみた。

女子学生における自己と父母の認知について (3) (秋山)

1・2年時

自分自身			
71.4% ○(性的に)純潔な 50.0% ロマンチックな しよげやすい 42.9%	感傷的な 39.3% 甘えた 35.7% わがままな 32.1%	素直な 神経質な 他人を気にする 28.6% 体の弱い 意志の弱い	25.0% 若さにあふれた 理想主義的な 感動しやすい 手先の不器用な 宗教的でない
○大人のまねをしない なげやりなところのある 孤独な おく病な 内気な	[21]		
39.3% 感動しやすい 32.1% 明るい 28.6% 手先の器用な 25.0% ひたむきな	53.6% やさしい 50.0% 礼儀正しい 46.4% 親切な 子ども好き 明るい 無責任ではない 32.1%	さっぱりした ひねくれない 28.6% ユーモアのある 友人の多い 25.0% 几帳面な ねばり強い	28.6% 未来に大きな希望をもつ 25.0% ヒステリックでない
[4]	[12]		[2]
32.1% 手先の器用な 独立心は強くない 服従的な 25.0% 支配欲は強くない 進歩的ではない わがままでない 利己的でない ヒステリックな	39.3% 包容力のある なげやりではない 甘えない 不安定でない 28.6% 無責任ではない 25.0% ねばり強い おく病でない 意志の強い 古いものの考え方をする	46.4% スケールの大きな 感傷的ではない 39.3% 内気ではない おく病でない 35.7% 独立心の強い 32.1% 行動力のある 頑固な	28.6% 指導力のある 体の強い 服従的ではない しよげない 政治に関心あり 25.0% ねばり強い 権力を求める
[8]	[9]		[14]
母親			父親



3・4年時

自分自身			
62.5% ○(性的に)純潔な 甘えた 56.3% しよげやすい 43.8% 不定定な 37.5%	ロマンチックな スポーツ好きな ○大人のまねをしない 宗教的でない スケールの小さい わがままな おく病な しつと深い	感傷的な 内気な 31.3% 冒険好きな 未来に大きな希望をもつ ねばりが無い 趣味は広くない 神経質な	25.0% 手先の不器用な 指導力はない 妥協的な 計算高くない 頑固な 虚栄心の強い なげやりなところのある
意志の弱い 服従的な 利己的な 疑い深い	[30]		
56.3% 献身的な 31.3% 感動しやすい 感傷的な 25.0% 手先の器用な ひたむきな	62.5% 礼儀正しい 56.3% 子ども好き やさしい 50.0% 親切な 無責任ではない 43.8% 几帳面な 37.5% 粗暴ではない	31.3% ものを深く考える 明るい 正義感の強い 目上の人にこびない 25.0% 古いものの考え方を ユーモアのある なげやりでない ひねくれない ねばり強い ニヒルでない	31.3% 正義感の強い 強がり 25.0% 指導力のある 行動力のある 頑固な わがままな 神経質な
[5]	[17]		[7]
43.8% わがままでない 31.3% 独立心は強くない 妥協的な 権力を求めない 服従的な 25.0% 献身的な 強がらない	43.8% 行動力はない スポーツ好きでない 進歩的でない ニヒルでない 強い刺激を求めない 計算高い 31.3% 不安定でない 37.5% 包容力のある あきっぽくない 甘えない なげやりでない 31.3% 利己的でない しよげない	43.8% おく病でない 無責任ではない 25.0% やさしい おうような 粗暴ではない ひねくれない 意志の強い 政治に関心あり	43.8% 感傷的ではない 意志の強い 服従的でない 権力を求める 31.3% スケールの大きな ヒステリックでない 計算高くない 非妥協的な 25.0%
[14]	[15]		[18]
母親			父親

図1 25%以上の学生によって2年連続して選択された項目の7区分表示図

図1をみると、他の5つの区分に比べて「母子共通」区分と「父子共通」区分にあがった25%以上の選択出現項目があまりに少ないことが目につく。さて、この図を作成してみても問題になるのではないと思われる点が2つあった。

まず、1・2年時と3・4年時では母集団の人数に差があることである。割合(%)でもって比較してみているが、やはり今後の課題として人数の差を縮める努力が必要であろう。次に、1・2年時は文学部生と短期大学部生が込になっているのに対し、3・4年時は文学部生だけの集団である。この点については、質的な違いをもたらす危険性がないとはいいい切れない。なぜならば、短期大学部は2年制であり、2回目の調査時期である12月にはそろそろ社会人としての準備を始めなければならないのに対し、文学部は4年制なので2年生から3年生にかけての時期は心理・社会的モラトリアム(pscho-social moratorium)の状況下にあるといえるからである。しかし、この問題の詳細な検討は、第二次の調査において両学部の対象者の人数増に努め、その折の1・2年時における項目内容の質的比較まで待つことにしよう。ただ今回は、4年間続けて調査に協力してくれた10名の文学部生という同一集団のデーターがあるので、1・2年時と3・4年時でどのような項目内容の推移がみられたかを調べてみよう。人数も少なく、非常に主観的な解釈になる恐れは十分にあるけれど、7区分ごとの特徴を簡潔な性格用語にまとめて次回の参考資料としたい。

さて、この解釈にあたっての取り組み方であるが、4年間を通して出現する項目を抽出し、これを核にして特徴の骨子を求め、ついで1・2年時と3・4年時にのみ現われた単独の項目群を付加させて内容の比較をしてみた。ただこの場合には図1のように25%以上の学生による出現項目というわけにはいかないので、前報²⁾と同じく3人以上の者によって選択された項目について試みてある。

「三者共通」区分 主として対人関係や日常の生活態度に関する項目があがっている。

「母子共通」区分 奉仕の精神。

「父子共通」区分 対人的な身のこなし方。

「父母共通」区分 自己を調整する方法を中心に、3・4年時になると生活への取りくみ方を示す項目が付加されてくる。

「自分自身のみ」区分 自己の性格的な掘り下げ(主にマイナ斯的な面での)がなされ、1・2年時の“若さ”から3・4年時になると“未来への不安を伴った前進”へという変化をみせている。

「父親のみ」区分 自己コントロールと社会的な取りくみ方(自己主張も含む)について。

「母親のみ」区分 現実肯定的な対処法を身につけている。

以上の分析は、あくまでも選択された項目を集会的にくみあわせる方法によって得たものである。これからはもっと客観的な特徴抽出ができるような工夫・努力をすべきであろう。

学生からみた評定対象三者間のタイプ分析の試み——量的分析より——

前報²⁾では、10名の個別分析の結果より、大まかではあったが5つの純型とそれらの2つが組み合わさった複合型、そしてそのいずれにもはまらない不定型の存在が浮かび上がった。そこで同年の学会発表³⁾において、この5つの純型について命名をしたことは前述した通りである。今回のタイプ分析への試みは、1・2年時と3・4年時に分けて28名と16名のデーターを詳細に比較検討した上で上記の事実を再確認することと、その推移(ただし10名について)の状況をみようとするものである。

女子学生における自己と父母の認知について (3) (秋山)

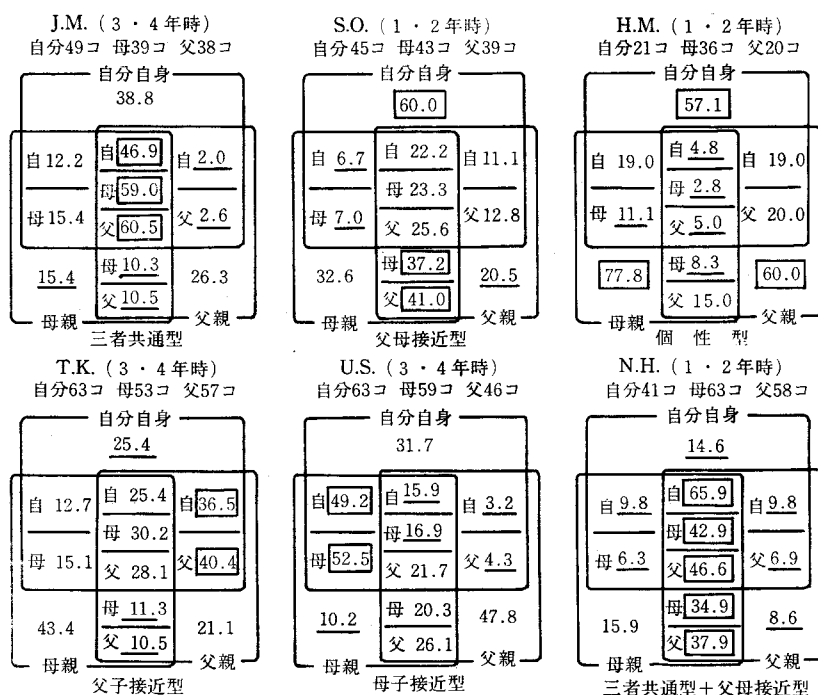
まず、7区分別にみた第3四分位数 (Q_3) 以上の出現率 (%) をあげてみよう (表3)。

表3 7区分別にみた第3四分位数 (Q_3) 以上の出現率の中央値 (単位 %)

—— 1・2年時 ——												
区分 評定対象	三者共通			母子共通		父子共通		父母共通		自分自身 のみ	母親 のみ	父親 のみ
	自分	母親	父親	自分	母親	自分	父親	母親	父親			
Mdn	50.0	45.1	46.6	25.7	31.0	25.8	26.7	38.1	41.0	57.1	46.5	57.5
range	31.3	31.3	32.2	25.0	26.9	24.5	22.4	33.3	29.6	53.1	39.3	50.0
	65.9	67.5	51.0	37.5	48.4	35.4	38.2	60.0	61.0	75.9	77.8	65.4
—— 3・4年時 ——												
Mdn	44.0	40.1	41.8	29.9	34.2	30.1	31.2	37.5	39.9	60.0	43.4	50.0
range	28.6	33.8	34.1	21.7	24.1	23.2	29.8	32.3	32.6	48.0	41.7	47.8
	65.7	59.0	60.5	49.2	52.5	36.5	40.4	58.5	54.3	71.1	53.8	60.0

「母子共通」区分と「父子共通」区分については、他の5つの区分と比べてかなり出現率が低い点でタイプ抽出上問題になるかもしれない。しかし、表2の2や図1との比較でみるならば Mdn 25% 以上という出現率はかなり高いものであるといえよう。

では、次に各タイプについての事例を紹介しておこう。図2は、5つの純型と複合型の一つ「三者共通型+父母接近型」の代表的な例を7区分表示図であらわしてある。



註 □ 第3四分位数以上 (上位1/4)
— 第1四分位数以下 (下位1/4)

図2 タイプ別にみた評定対象三者間認知の事例 (単位 %)

表4 個人別にみた認知タイプの一覧

名前	年時	1・2年時	3・4年時
Su.N.		三者共通型	
T.F.		三者共通型+父母接近型	→ 父母接近型+準, 三者共通型自・母(自分-認知)
N.H.		三者共通型+父母接近型	
U.I.		三者共通型+父母接近型	
J.M.		三者共通型+父子接近型	→ 三者共通型
A.H.		三者共通型+父子接近型	
M.I.		準, 三者共通型父・母(自分+認知)	
Y.S.		父母接近型+準, 三者共通型自・母	→ 三者共通型+父母接近型
A.E.		父母接近型	
Y.F.		父母接近型	
S.O.		父母接近型 (自分-認知)	
M.S.			父母接近型 (自分-認知)
M.B.		個性型	→ 母子接近型
H.M.		個性型	
H.H.		個性型	
K.T.			個性型
U.H.		個性型+母子接近型	→ 準, 個性型自・父
Yo.K.		準, 個性型母・父	
M.M.		準, 個性型母・父	
T.K.		父子接近型 (母±認知)	→ 父子接近型 (母±認知)
M.F.		父子接近型 (自分±認知)	→ 父母接近型 (自分±認知)
R.F.		父子接近型	
K.N.		父子接近型	
Y.K.		父子接近型+母子接近型	→ 父子接近型 (母±認知)
M.F.			父子接近型 (母±認知)
U.N.			父子接近型 (母+認知)
Sa.N.		母子接近型	→ 母子接近型+準, 三者共通型父・母
T.U.		母子接近型	→ — 不定型 —
S.I.		母子接近型 (父+認知)	
T.H.		母子接近型 (父+認知)	
K.H.			母子接近型 (父±認知)
U.S.			母子接近型 (父±認知)
K.I.		— 不定型 —	
Y.N.		— 不定型 —	

三者共通型とは、「三者共通」区分の項目数を出現率になおした場合、評定対象の自分自身、母親と父親の三者共が全体の上位1/4にはいっている場合である。また、母子接近型・父子接近型・父母接近型では、各々の2つの評定対象が共に Q_3 以上にはいっているものをいい、個性型とは、「自分自身のみ」区分・「母親のみ」区分・「父親のみ」区分がすべて上位1/4 (Q_3 以上)にはいったものである。なお、「準」の扱いをしたものが2つある。これは三者共通型と個性型についてであるが、評定対象の三者のうちいずれか二者が、上位1/4にはいっている場合に限りこれを適用した。この準扱いの組み合わせとしては、自分—母親 自分—父親 母親—父親 が考えられる。残りの3つの型の場合、評定対象者のいずれか一方が上位1/4にはいっていても、他方が Q_3 以下の出現率であるならばタイプ抽出の分析から除外して処理をしている。なお、不定型についてであるが、これは7区分のいずれにおいても上記の諸条件を満たしていないものとした。

個人別にみた1・2年時と3・4年時のタイプがいかなるものであったのかをまとめて一覧にしたのが表4である。1・2年時では上位1/4にはいる者は7名、3・4年時では4名と差があるなかでのタイプ抽出ではあったが、表3をみる限りでは数量的に大きな出現率の差は認められなかった。だが、どうしても母集団の質的な相違の可能性についての疑問は、ここでもぬぐい切れないままに残ってしまう。そこで今一度、4年間継続して協力してくれた文学部生10名についてのタイプの推移について確かめておこう。1・2年時と3・4年時に分けた今回の分析では、同じタイプの者1名。複合型から純型へ・純型から準型へという変化はみせるものの、ほぼ同じタイプを包含していた者が6名、そして残り3名がまったく別のタイプに移行していた。

これは一体なぜなのだろうか。まず考えられる理由の第1は、母集団の質的・量的問題があげられる。しかし、この点に関しては第二次の調査で人数増に努め、同一母集団のなかでの分析をまたねばなるまい。第2の理由としては、西平⁴⁾の対人関係・性格特性・生活態度・社会意識・人生に対する諸要因よりなる75項目は、青年期の自分自身と成人期にある両親との認知的比較をする場合に、1・2年時と3・4年時でまったく変化しないものばかりで構成されているとは断言できない要素を多分に含んでいるのではないかということである。そうなれば、選択された項目が1・2年時と3・4年時でまったく異なった区分に出現したり、消失したり、また区分間の大きな移動をみせるという可能性も考えられる。

この問題についても、今後の課題の一つではあるが、今の段階でもある程度の分析は可能である。再び10名の学生のデータをもとにして、出現項目内容を量的分析の面から追求し、次

表5 評定対象別にみた三種の出現形態の平均項目数と SD

— 4年連続協力の10名について —

(単位 コ)

年時 評定対象	形態	1・2年時				3・4年時			
		共通出現	移行出現	単独出現	計	共通出現	移行出現	単独出現	計
自分自身		18.3	16.5	5.1	39.9	18.3	17.2	12.2	47.7
		8.8	6.3	3.3	10.2	8.8	5.7	6.6	10.5
母 親		17.0	14.2	3.7	34.9	17.0	18.0	10.1	45.1
		11.6	3.3	2.3	11.0	11.6	5.7	4.6	12.0
父 親		19.1	15.5	4.3	38.9	19.1	19.0	9.3	47.4
		11.3	5.8	3.3	12.8	11.3	4.4	7.0	15.1

の新しい研究のための発展的課題への導入としておきたい。ただし、今回は一人一人の分析をするのではなく、あくまでも10名についての平均出現数の推移傾向をとらえておくだけに留め、個人差については以後の研究に期待したい。ここでは4年間を通して出現するものを「共通出現項目」、1・2年時と3・4年時で区分間に移動をみせるものを「移行出現項目」、1・2年時と3・4年時で各々独立して出現をみせるものを「単独出現項目」としておくことにする。表5は評定対象ごとの三種の平均出現項目数であり、図3は7区分表示図によってそれをあらわしたものである。この種の出現形態のうち量的に1・2年時と3・4年時の推移を比較分析できる

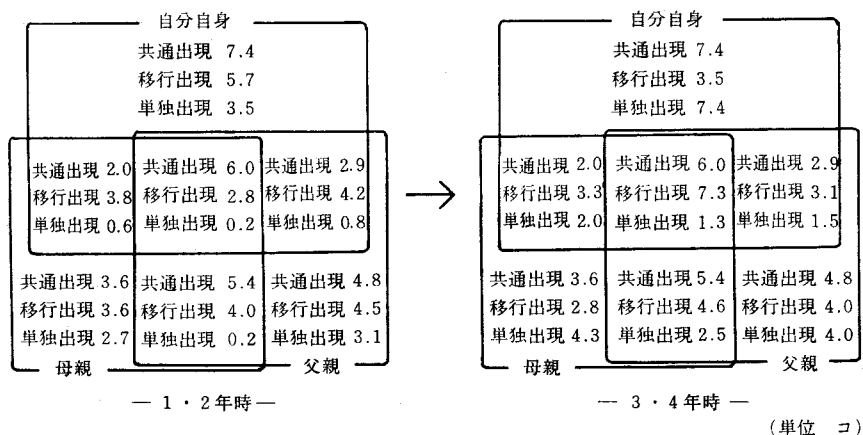


図3 7区分表示図でみた三種の出現形態の平均項目数 — 10名について —

のは“移行出現項目である。この出現形態の項目の区分間移動は、一体どのような形でなされていくのであろうか。一人当たり平均0.5コ以上の出現をみせたものの移行パターンを調べてみると図4のような結果が得られた。

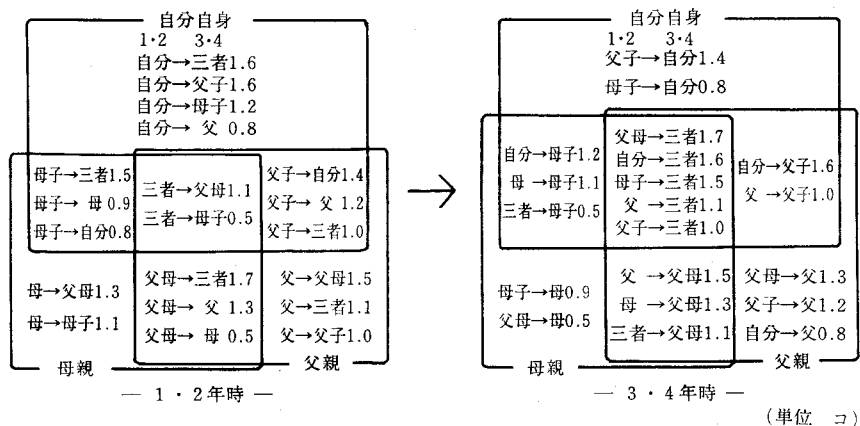


図4 1・2年時と3・4年時の比較における平均0.5コ以上の区分間の移行出現のパターン — 10名について —

この図をみると、「自分自身のみ」区分より「父親のみ」区分への移行パターンが出現している(0.8コ)以外、残りのすべての移行パターンはそれぞれ相互に関連をもつ区分内に移動しているだけということが明らかになった。この結果だけでみると、移行出現をしている項目

といえども著しく逸脱した大きな変動をみせるとはいえないということが確かめられたようである。4年間連続して出現する“共通出現項目”とあわせこの二種の出現形態については、三者間の認知においてあまり変化をみせない項目であるといえる（あくまでもこの場合平均的にみて）。となると、残る“単独出現項目”の存在が今後の焦点になるのかもしれない。この問題も、第二次の調査において、単独出現項目対共通出現・移行出現項目のからみあいについて、質的な面からさらに検討を加え、三者関係の認知について深化をはかっていくべきであろう。

ここで参考となる資料の一つあげておこう。託摩⁶⁾は、宮城音弥作成の性格調査表（60項目）をある大学生の1年生に実施し、それから3年過ぎて4年生になったときにふたたび同じものに回答を求めさせたところ、性格の変化のはげしいといわれる青年期においても、自分の性格の認知像はそれほど変化しなかったという結果を報告している（p. 70-72）。

学生による自己と父母の認知においては、5つの純型とその複合型そしてそのどれにもはいらない若干の不定型というタイプが確かに存在しうるということを、7区分表示法によって立証した。今後は、図1に示されているような項目の質的内容の検討をもあわせて研究できるような新しい道を切り開いてゆきたいものである。この7区分表示法は、前報²⁾では4年間の出現をもとにし、また学会発表³⁾と本研究においては前者が1・2年時のみで後者が1・2年時と3・4年時について2年連続選択の項目をもちいて、認知のタイプを抽出するために駆使された。しかし、ここでさらに自由な立場に立って眺めてみるならば、この研究方法はたとえ1回の調査のみの場合であっても十分有効でありうるし、そこで得られた5つのタイプをもとにさまざまな比較研究が実施できる可能性をも内蔵しているように思われてくるのである。

この論文を終えるにあたって最後に、今後この方面の研究を進めていく上で大きな指針となるであろう西平⁵⁾の『性格』についてのとらえ方と、彼のいう“人生への身のこなし方”の考え方について少し触れておきたい。「性格はかえられるか」という問いに対して彼は、『性格』を内容のレベルに応じて性質（性格特性）・性格・人格の三種にわけ、ある設定条件の下にはあるが、次のような区別をしている。

性質：やさしい・おとなしい・臆病なといったように形容詞で表現されるもので、努力によってはかなり変えられるし、環境次第で流動的に変貌する。

性格：タイプ（類型）として統合されたもので、遺伝と環境によってかなり早い時期にできあがり、一度完成するとまず変わらないとみる。たとえ変わったと思っても、2〜3年たつともとの地が出てくる。

人格：現実社会のなかで、性質や性格をどう使い、それがどのような価値をあらわしているかといった倫理的人格性である。これは青年期以後の価値観によって変わり、意志による努力次第でも変えられる。

ここでいう人格性とは、性質や性格について、それが人生のなかでどのような価値を創造していくか、その個人と他の人びとにとってどのような意味をもつかという視点からもう一回り大きなスケールで捉えたものといえる。このようにみていくと、一つ一つの性質が組み合わさって性格ができるともいえるが、逆に統一された人格によって一つ一つの性格特性に独自の色がついてくるともいえるのである。『性格』という語は、ときどきの使い方では性質（性格特性）・性格型・人格という三種の意味をもつと述べているが、この三種が常にからみあい、調和し、対立し、総合されてその人の“もち味”となるのである。しかし、この三種のうち性格と人格という語は他の複雑な要因がからみあうことが多く、そのため大変あいまいになったり、

流動的になることもあるので、彼は、これをひとまとめにして“人生への身のこなし方”という表現で統合を試みている。この身のこなし方のなにほどかは、自分自身の欲求や意志によって自分が選んでいくのだから、一方的な運命とばかりはいいきれないものがある。そしてこの自由は青年期にはいるにつれてますます大きくなり、現実的になるとみている（以上 p. 97-158 より抜粋）。ついで、彼は身のこなし方の修得法について次のように述べている。“人間には、自己を信じて拡大を続ける成長発展とともに、その限界を謙虚にふりかえり、自己否定を通して本当の自己を自覚していく諦念と呼ばれるもう一つの魂の発展形式がある。”この後者のような修得を深く学びとるようになるのは、成人期に達してからのことであろう。

今一つ、彼は現在の筆者にとってとてつもなく大きな課題（問題）を提供してくれたのである。それは、これまでのようなアンケート形式の研究アプローチだけではとても恒間見られるものではなく、さらに臨床心理学的検査法としての投影法やカウンセリング・心理療法という分野との密接なかわり合いのなかで、自己と両親についての認知や感情、行動的側面をとらえることの大切さを教えているのである。“性格は相対的に変わりにくいもの、変えにくいものである。この場合、二つのことに注意する必要がある。1つは、環境条件の急変によって一時的に行動様式が変わるのを観察して、性格は変わるものと判断してしまわないこと。第2に、見せかけの変化と内面の変化を混同しないことである。性格型は外観からみた顕型（フェノ・タイプ）で決められてはならず、内面で行動を動かしている元型（ジェノ・タイプ）的な心の力学によって見極めなければならない。元型として捉えられる性格はめったに変わるものではない（p. 119-120）。”西平のいう性質（性格特性）と人生への身のこなし方についての考え方と、上述した課題を心にしっかり留めつつ、これからもこのアンケート形式による追跡研究を継続しつつ、並行して新しい研究分野開拓への模索を開始せねばなるまい。

来年に迫った第二次の調査（1982年から1985年まで）には、多くの学生諸氏の積極的な参加・協力を心から期待したいものである。

文 献

- 1) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 VIII 23-38 1974
- 2) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について（2）—4年間の縦断的研究— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74 1980
- 3) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について（2）—三者関係のタイプ分析— 中国四国心理学会論文集 Vol. 13 68 1980
- 4) 西平直喜 新しい存在と価値の発見 津留 宏編 青年心理学 138-144 有斐閣 1970
- 5) 西平直喜 伝記にみる人間形成物語（2） 子どもが世界に出会う日 有斐閣 1981
- 6) 詫摩武俊 星野 命編 性格は変えられるか 79-112 有斐閣 1972

（幼児教育学科 助教授）

—昭和 56 年 8 月 28 日 受理—